



専業ババ奮闘記(その2) 14

木幡智恵美

同窓会 (3)

携帯を出して着信を確認する。かれこ一時間半は、こうした行為を繰り返しながら、松江駅の構内を歩いたり、ホテル周辺を回ったり。十四時過ぎになるといので、それより少し早めにホテル前まで夫に送ってもらったのだが、途中一回、「今昼食を終え、松江に向かう」と着信があつてから、一時間以上経っている。今日予定していたスケジュールを大幅に修正しなければならぬ。堀川遊覧、松江城見物、いづれをメインにするべきか。堀川を舟でゆったり味わって欲しかったけれども、限られた時間を思うと、松江城一本に絞らざるを得ない。あれこれ考えているところに、着信が入った。「今、高速に乗った」というメール、あと三十分ほどだ。バスの時刻を確認するため、駅舎を通過し、県庁前付きのバスの時刻を記録していく。

同窓会当日、待ち合わせの時刻が大幅にずれたけれども、無事二台に分乗した六人と落ち合うことができた。「だいぶ待たせたね」というKに、「うん、駅の周りで時間つぶししてた」と平静を保ちながらも、昼食の話題で談笑する面々に、香気なものだと呆れてしまう。ま、苦あり楽あり、四年間を共に汗した仲間たちだ。元気な顔を眺めまわしているうちに、待ち時間のイライラもやきもきも吹き飛んでしまった。

チェックインを済ませたKに、「宴会場の予約時間があるから、堀川遊覧はやめて、松江城だけにするね」と確認をし、バスで県庁前まで行く。つい三年前まで、嘱託職員として勤務していた建物の前を、半世紀近く前に共に過ごした仲間たちと歩くのは、時間の層がずれたような妙な気持だ。

松江城の天守に上るのは、茨城の叔母と従弟夫婦が来て以来だから、かれこれ十年振りか。国宝に指定されてからは初めてだ。乏しいながら、知っていることを話しながら上っていく。各々が興味津々で展示物を眺め、感嘆の声を挙げるのを見ると、地元民として心が躍る。

松 江イオン内にあるシネコン、東宝5のポイントカードの有効期限が月末で切れるので、土曜の夕方妻と二人で出掛けてきました。ちなみに有効期限が切れるとどうなるのかというと、それまでに貯まっていた大切なポイントがパーになってしまうのです。だからといって、それだけのために見たくも無い映画にお金を払って無理やり見る必要も無いわけですが、夫婦50歳割引で料金も割安だし、公開中の作品の中から二人の趣味に合った映画を見つけることはさほど困難ではありません。

実はひと月ほど前に妻のポイントカードの期限が数日後に迫っていることが判明し、急遽イオンに赴いたのですがコロナ禍の影響で新作の公開は殆ど延期状態。そんな中ダメもとで見た『一度死んでみた』という訳の分からぬ映画が意外とツポにはまって楽しいひと時を過ごすことができたのです。

では今回はどうしようかと事前のすり合わせが始まったのですが、私が密かに想いを寄せていたのが『ランボー ラストブラッド』の、それも吹替版でした。多分妻には拒否されるだろうなあと思っていたのですが、意外にもあつさりOK

が出て驚きました。それも、妻の仕事先にランボーだのエクスペンダブルズだのが大好きな人がいて(女性です)、既に見たというその方「かなりグロいよ」という事前情報を得ていたのにも拘わらずです。

逆にそれを聞いた私が、嫌なら他の映画でもいいよとビビッてしまったのですが、いや大丈夫と言うのです。おやつ、この人はもしかしたらストーンファンだったのかな?それにしても福山雅治さんと違いすぎるな?などと勘ぐってみたのですが確認作業は止めました。字幕版か吹替版かについては、どっちでもいいとのことだったので、ここは私の趣味を優先させていただきました。吹替版も良し悪しがあつて、話題作りのタレントの吹替えは言語道断ですが、スタローンのフィックス声優のささきいさお氏なら安心です。

で、肝心の『ランボー ラストブラッド』ですが、ご存知ランボーシリーズの第5弾。娘のように可愛があつていた旧友の孫娘を拉致してなぶり殺しにしたメキシコマフィアにランボーおじさんの怒り爆発。「うお前の心臓を抉り出してやるうっ!」殺戮マシーンとしての血が沸騰します。いや、沸騰しすぎ。

30代フリーター やあ、ジイさん。中国の強行した香港国家安全維持法（国安法）の施行で早くも表現の自由への抑圧が始まった。

年金生活者 北京政府にとって国安法の制定は、アメリカとの覇権争いのための新たな防衛の武器を手にしたことの意味する。デモを封じて民主化要求を不可視化できれば、諸外国からの中国非難の機会を奪う効果がある。

米中の対立は、国際紛争を解決する最大の手段が依然として戦争であることとをあらためて示している。ただし、その戦争は第2次世界大戦までのような熱い戦争、リアルな戦争ではなく、東西冷戦を嚆矢とする冷たい戦争、バーチャルな戦争にほかならない。

バーチャルといっても、直接の破壊と流血をとまわらないというだけであって、経済制裁によって実害を生じさせる点ではリアルと言える。そこが前世紀の東西冷戦とは違うところだ。経済のグローバル化が進んでいなかった当時は、実行可能な経済制裁は限ら

れていた。核による抑止力の競い合いが戦いの中心だった。もし一方が核を使えば、たちまち相手から核による反撃を受ける相互確証破壊が成立し、核の使用は封じられた。代わりに、通常兵器による局地的な代理戦争が噴出した。20世紀は核による軍備のグローバル化が進んだ時代でもあった。

これに対して、経済がグローバル化した現在の米中対立は抑止力以上に経済力を競い合う戦いとなっている。

30代 どっちが勝つんだ。
年金 この戦いに勝敗があるとすれば、それは今後の資本主義の変容にどちらが適応できるかによって決まるだろう。

資本主義を変容させるのは富の稀少性の縮減だ。人間は稀少性から自由になったとき、次にどんな自由を求めるか。それは不必要なものを求める自由ではないか、と私は想像している。

だとしたら、それに適合する政治社会体制に移行しやすいのはアメリカのように見える。だが、この超大国は自

らの政治社会体制を歴史の最高、最終段階のものと考えているふしがある。それを考えると、アメリカに有利とばかりはいえなくなる。

30代 自由な香港の死はいたましい。
年金 中国共産党の考える一国二制度とは、中国本土が社会主義で、香港は資本主義という二制度ではなく、本土で採用している「社会主義市場経済」、すなわち政治は共産党独裁、経済は資本主義という二制度であることが、国安法の制定によってはっきりした。

社会主義市場経済は、政治的な自由を制限する代わりに経済的な自由を保障し、国民の生活水準を向上させた。その二重構造が政府に対する国民の反感を和らげた。政治も経済も不自由な「一国一制度」だったために崩壊した旧ソ連のような事態を免れさせた。中国共産党が世界中から非難されても香港の本土化に社会主義市場経済化を押し進めるのは、この成功体験があるからだ。

30代 中国が民主化しない限り、香港はどうにもならないということか。
年金 ロバート・カプランというアメリカのジャーナリストがこう語っている。「もしリベラルデモクラシーを中国にそのままあてはめれば、中国では異民族同士が血を流す事態が起き得るでしょうし、国内は新たに分断され、無秩序に陥ることになるでしょう」

（2019年5月27日朝日新聞デジタル）。

「異民族同士が血を流す事態が起き得る」ということは、民主制に不可欠の国民の均質性が成立していないか、不十分であることを意味する。ここでいう国民の均質性とは、民族や居住地が異なっている、全員がひとつの国民であるという共通認識を指す。それなしには民主主義の柱のひとつである平等は成り立たないし、もうひとつの柱である自由も、それがみなに等しく保障されることなしには自由たり得ない。

中国が、ひとつの国民としての共通

認識を欠いている、あるいはそれが不十分な国家だとしたら、それは近代的な国家ではなく、古代以来の「帝国」であることを意味する。帝国とは複数の民族や地域を支配する国家、すなわち不均質な民衆を支配する国家を指している。香港に一国二制度という、近代国家では考えられないような不均質な仕組みを導入できたのも、帝国だからこそだ。

ニュース日記 746 中村 礼治

中国はなぜ民主化に向かわないのか

同じ意味で旧ソ連も帝国だった。その崩壊は帝国の崩壊を意味した。すなわち共産党に支配されていた複数の民族や地域が複数の国家として独立した。後継国家のロシアが少なくともソ連時代より民主的になったのは、帝国の崩壊によって均質な国民が成立したからだ。

そのさい「異民族同士が血を流す事態」が起きることなく崩壊が進んだのは、ソ連が連邦制をとっていたのが一因と考えられる。複数の民族や地域が一定の独立性を持つ連邦制という仕組みがあったから、その仕組みの解除という手続きを経ることによって、帝国を解体することができた。

30代 連邦制ではない中国にはそれができない。

年金 アメリカが軍事力で民主制を押しつけたイラクが宗派や民族による内戦に陥ったことを考えれば、中国も民主制の代償として「異民族同士が血を流す事態」を免れない。ロバート・カプランはそう考えたのかもしれない。